

国語科

直 寄 宏 美
石 川 誠
山 本 瑞 穂

1 国語科の授業における集団で学ぶよさ

国語科の授業において「集団で学ぶよさ」について考える時、それは、めざす子どもの姿「進んで言語に働きかけ、豊かな言語で伝え合おうとする姿」に深くかかわっていると考える。そこで、このことについて述べていくこととする。

進んで言語に働きかけるとは言語としての国語を話す、聞く、書く、読むことはもちろんのこと、これらの言語活動を通して思考を深めたり、想像を膨らませたり、心を育てていくことを意味している。さらに、他者と言語を通して互いの立場や考えを尊重しながら、コミュニケーションをもつということでもある。つまり、言語を通して認識力、思考力、想像力、判断力、言語感覚、豊かな心情を培うことであり、他者との関係のなかで豊かな人間性を育むことにつながると考える。

豊かな言語で伝え合うとは「国語を適切に表現し正確に理解すること」を基に伝え合うことにつながる。言語感覚を磨くことで身につくことでもある。話すこと・聞くこと、あるいは書くことや読むことの具体的な言語活動の中で、相手、目的や意図、多様な場面や状況に応じて、どのような言葉を選んで表現するのがふさわしいものであるかを判断したり、話や文章を理解する場合にそこで使われている言葉が醸し出す味わいを感覚的にとらえたりする言語に対する感性でもある。それは、一人一人の子どもの言語生活や言語活動を充実させ、ものの見方や考え方を個性的にすることにも役立つ。伝え合うとは、相手の伝えることを受けとめることこそ大切である。伝えることと受けとめることがお互いにできて、はじめて「伝え合う」ことが成立すると考える。相手の伝えることを受けとめるには、単に相手の言っていること、書いていることだけから考えるのではなく、その言葉の背景まで知ろうとすることであり、そこまで考えることができてこそ、相手が分かり、コミュニケーションが成立していくのである。

豊かな言語で伝え合おうとする姿とは、人間と人間との関係の中で互いの立場や考えを尊重しながら、さまざまな言語活動を行うことによって、互いの思いや考えを伝えたり受け取ったりしようとする子どもの姿であり、これからの情報化・国際化の社会で生きて働

く重要な国語の力を資することにつながるのである。

言うまでもなく、国語科で習得する母語としての日本語の能力は、日本人としての生活の基礎である。人は言葉を通して、自己をみつめ、社会、自然を認識し、自らを高めていくのである。言葉の教育のすべてを担う国語教育は、まさに「人として生きていく力」を育む教科であるとも言える。それだけではない。すべての学習が、相互協力や共同思考に必要な言語能力がなくては成立しないのである。学校教育における教科等のすべてが学習者の人間形成を目指すものであることはいうまでもない。そして、国語科においては、豊かな言語生活を営むことができるようになることは、生きる力を育むことにもつながり、一人一人の人間性を形成するためにも、文化の継承・創造のためにも大切なことである。さらには、世界の様々な言語や文化に広く目を向ける大切な手がかりともなるであろう。

2 集団で学ぶよさが息づく

授業へのアプローチ

子どもが学習材と出会った時に、これまでの生活経験や学習経験をもとに、話したい、聞きたい、書きたい、読みたいという思いがわき起こってくる。学習を進める中で、その思いが、自分なりの表現でもっと上手に話したり書いたりしたいなどの思いになる。そのために、自分自身の課題を見つけ、その課題を解決するために言語に働きかけていこうとする。そして、最終的には、集団の中で互いの考えを分かち合いたいという強い思いになっていくのである。

これをもとに、自分なりの課題を持ち、その課題に沿って、解決の過程を考えたり学習の方法を工夫したりする。また、自己学習することで自分の考えを持ち、それをもとに課題を解決していこうとする。(共有・洞察)

言語から感じたことや想像したこと、考えたこと、理解したことを、生活経験や学習経験と関連づけたり、他者と聴き合い話し合ったりする中で、自分の思いや考えを深めていく。国語科では、特にこの過程を大切にしていきたいと考える。互いの考えを伝え合うために、より適切な表現をしようとするであろうし、正確に理解しようとするからである。聴き合い話し合っ

かかわりながら新たな発想や思考を創造する原動力となるのである。(共鳴、共感)

さらに、自分の言語活動をふり返り、自分が得た内容や身につけた力を自覚し、次への課題を明らかにしたり、いろいろな場面で生かしていこうとする。これらの力が互いに連動し合い支え合って、よりよい言語活動へと導いていくのである。(調整、適応)

(1) 学びのシェアのプロセス

とのかかわりから

一人一人の子どもの実態を把握し、「こんな力をつけたい」という願いをもとに、単元が終わった時の子どもの姿を想定したうえで学習材を選ぶ。

そして、子どもにとって必要感があり、主体的にかかわっていける言語活動になるように、子どもが興味・関心を持てるような学習材との出会わせ方を工夫する。

また、学習内容や学習方法を、子ども自身が考えたり選択したりできるようにする。

子どもが自分なりの思いや考えをもてるように、これまでの生活経験や学習経験を生かして言語と向き合うことのできるような活動を取り入れる。その上で、学習材と出会った時の子どもの感動や疑問を素直に表現する場を設け、それを全体に広めたり位置づけたることで、学習の見通しがもてるようにする。また、自己学習の場を設定し、十分な時間を確保することで、集団の中で互いの考えを分かち合えるような、より能動的な学びへとつなげていきたい。

一人一人が読み取ったこと、考えたこと、根拠となることを聴き合い話し合い、練り上げていく活動を通して、自分自身の読み取りや思考が高まっていくことになる。自分なりに読み取ったことを様々な表現方法で聴き合い話し合うことによって、新しい知識を得たり曖昧だった考えが確かになったりして、互いの考えをさらに深めていくことができると考える。話し手(語り手)と聞き手がともに一体となり協同的なコミュニケーションを成立させることが、聞き手の既有知識を活性化させ理解を促すことになる。一人一人にとって意味のある話し合い活動の場になるように、学習形態を工夫する。その際、お互いの立場や考えを尊重し認め合うことが大切である。

(2) 規範づくりについて

教室での規範づくりを学級づくりの面から考察してみる。話し言葉で考えを伝えること

は、社会生活をおくる上でも最も大切な力であるといえる。まず、自分の考えを持つ。そして、その考えを話し言葉で積極的に表現する。そのような経験の積み重ねが話す力を育てるのに大切である。子どもたちが自分の考えや意見を話す場をできるだけ多く設定する必要がある。その時には、話し手にとっていちばん心強い「よい聞き手」も必要となる。結論を急がず、ゆっくりと話を聞く態度を育てることでよい聞き手を育てることになり、そのことは、よい話し手を育てることにもなる。

読むことにおいては、イメージを広げ、いろいろな価値観を共有することができる。言葉の背景を想像し、言葉の持つ豊かさを読み味わうことで互いの感性を比べ、視野を広げ、新しい価値を受け取り、協同でつくり上げていくことができる。

書くことにおいては、言葉を通して人とのかかわり合い、誰に書くのか、何のために発信するのか、相手にわかるように書かれているのか、といった言語意識の必要性を自覚することが大切である。

つまり、学級を基盤として温かい人間関係を育てていく活動と国語の力を育てていく活動とが互いに支え合っていくような授業をめざしていくことによって教室の規範を育てながら教科の学びを高めていくのである。

(3) 評価について

自己評価活動で自分の言語活動のよさの自覚を促す。その単元で学習したことを課題ごとに、継続的にふり返る場を持つ。自分が得た内容や身につけた力を自覚したり、互いに評価し合ったりすることは、次単元への意欲にもつながり、ひいては、これからの日常生活の中で起こるであろう様々な言語活動の場の中に生きてくると考える。その際、書く活動を取り入れることによって、学習の結果を目に見えるものにするには、自己の変容の自覚には欠かせないものである。その他に、座席表にそれぞれの子どもの自己評価(自己目標の達成)や他者評価(相互評価や指導者評価)を書き入れ、子どもに戻すことも行っている。それは、価値観形成をフィードバックすることにつながる。

また、本校では、それぞれの子どもの自分の自分をふり返り、心に残ったことや自分なりに思ったこと考えたことを、「あゆみ」の中で毎日綴っている。その「あゆみ」を活用することで、授業とは時間をおいて自分を見つめ直すことができ、さらなる自己の変容に気づいたり、新たに発見したりすることができる。

3 実践例 — 1年 —

入学以来、子どもは、国語科の様々な学びを経験してきた。読むことにおいては、読み聞かせを聞いたり、自分の好きな本を読んだり、声に出して読んだり、場面の様子などを想像しながら読んだりしてきた。子どもは、読み聞かせを聞くのが大好きである。しかし、自ら進んで読書をする経験が少ない子もみられる。音読をすることも好きで、「おんどくめいじん」をめざして練習し、自分で工夫して音読しようとする子も出てきた。また、2人組やグループ、クラス全体で声をそろえて読む楽しさも経験している。さらに、登場人物の気持ちや場面の様子を想像する学習では、一人一人が想像したことを自分なりの言葉で表現し、それをグループで音読劇にすることができた。国語科の学習を通して、読むことの楽しさと友だちと一緒に勉強することの楽しさを経験してきた。しかし、書かれている事柄の順序に気をつけて内容の大体を読み取ることの学習は経験していない。本単元では、さし絵や写真などを見て想像を膨らませながら、内容の大体を読み取ることをめざしたい。その際、一人一人が自分の考えをもち、友だちの考えを聞き合いながら学習を進めることを大切にしていきたい。

(1) 単元名 しゃしんをつかって せつめいしよう

- (2) 目標
- ・写真やさし絵のあるやさしい科学読み物に興味をもち、楽しく読むことができる。
 - ・写真を使った問いかけや答え方を考えながら、内容の大体を読むことができる。
 - ・写真を見て、簡単な説明の文を書くことができる。

(3) 国語科としての学びと教室の規範にかかわって

国語科では、生涯にわたって読書に親しみ、読書を通して生活を豊かにする人間の形成をめざしている。学習指導要領の低学年の読むことの目標においても、書かれている事柄の順序や場面の様子などに気づきながら読むことができることと、楽しんで読書する態度の2つが示されている。言い換えれば、読むことの力は、作品を読む力と日常的に読書を継続する力の2つと考えられる。本学級の子ども達は、4月以来ひらがなの読み書きに始まり、初歩的な詩や物語を学習してきた。「ともだち」の詩では、一人一人が読み方を工夫し、みんなの前で音読した。そして、それを声のアルバムに納めた。「はなのみち」の学習では、さし絵をもとに、物語の順番や登場人物をはっきりさせるなど物語の読み方を経験した。そして、登場人物になりきって音読劇をするために簡単なシナリオ作り挑戦した。また、担任によるお話プレゼント（読み聞かせ）を行ったり、「読書の木カード」を用いて読書記録をとりながら読書を続けている。

また、「教室の規範」として「友だちの考えを聴き取ろうとすること」、「自分の考えを持つこと」、「自分の考えをみんなに分かるように表現すること」をめざしてきた。「みんなでするべんきょう」を合い言葉に、一人一人が考えを持ち、それを出し合う中で、学習を進めることを大切にしてきた。そのため、個人差はあるが、ほとんどの子が考えを持つことができるようになった。しかし、考えを持つことはできても、それをみんなに分かるように表現することはまだまだである。また、友達が何を言いたいのかを受け止めながら聞くことが難しい子もいる。そのため、読み取ったことを聴き合う楽しさを実感できるような授業を構成したいと考えている。

低学年の読みの力は、書いてあることの大體をとらえることが基礎となる。それには、まず順序に従って内容を押さえたり、事柄の順序などを考えながら読むことが必要である。子どもは、説明文を読む時、写真やさし絵などの視覚的情報によって、内容を深くとらえたり、想像を膨らませたりするであろう。本単元で扱う「だれだかわかるかな」は、大きな写真と特徴をとらえた本文からなる。つまり、写真にぴったりの説明が簡潔な文章で書かれているのである。そこで、本単元の学習では、読む力を確かなものにするために、写真と説明文のつながりに目を向けてそれを明らかにすることが大切と考えた。その際に、「学びのシェア」の「共鳴（共感）」の場を大切にすることによって、一人一人が考えをもち、それをみんなで聴き合うことによって学習をさらに深めることができると考える。さらに、説明したい事柄を順序よく書いたり、相手を選んで楽しく工夫して紹介したりして表現する活動へ広げていきたい。

(4) 集団のよさが息づく授業へのいくつかのアプローチ

① 学びのシェアとのかかわりから

一人一人が「読む力」をもつことは、自分から進んで主体的な読み手になることと考える。そのためには、一つの作品を読む力と必要に応じて様々な本を読む力の二つが必要である。また、自分で課題を見つけ、解決することができる自己学習力を身につけることも重要である。そこで、本単元では、次のような単元構成を考えた。

まず、虫めがねを持って中庭へ飛び出したい。自分の発見を話したり、友達に問いかけたりすることで、みんなに分かってもらうには、どんな説明をすればよいかという目的意識が生じる。さらに、写真の紙芝居を見ることで、写真のよさに気づき、自分たちも伝えたいことがよく分かる写真紙芝居を作ってみたいという思いを持たせる。そして、写真絵本の並行読書を始め、多読を促すと共に、説明したい本を選ばせる。教材文を読む段階でも、本文と写真のつながりを確認したり、構成（問題-答え）を整理しながら読みを進めたい。毎時間の終わりには、その日のふりかえりをして、みんなに分かってもらうための説明の方法を増やしていきたい。写真紙芝居を作る段階では、説明の方法を確認し、説明の文を書かせたい。そして、対象や提示の仕方をもとにグループ分けをし、写真紙芝居にまとめる。発表会では、写真の選び方や説明の仕方のよいところを見つけ合わせたい。

② 規範づくりについて

本学級では、「みんなでする勉強」を合い言葉にしてきた。一人一人が、読みとったことを持ち、それを出し合う中で学習を深めることを大切にしてきた。しかし、考えは持てても、出すことができない子や、出しても声が小さくみんなに伝わらない子、友達と同じでない不安になる子もいる。また、自分の読み取ったことを話すことで満足してしまい、友達の考えをしっかりと聞けない子もいる。そこで、本単元では、できるだけ多くの子に発言させるために、考える時間を保障する。そして、同じ意見でも、「同じです。」で終わらせるのではなく、自分の言葉で言わせたい。また、声の小さい子や何を言っているのかわからなかった子には、教師だけがかわる

単元計画（総時数 9 時限 + 課外）

主な活動と内容	主に意識する規範	評価のポイント
1 学習を設定し 学習計画をたてる ・中庭で大発見をしたよ みんなに伝えよう ・写真紙芝居だと説明がよく分かるね <大発見を写真紙芝居にしてお話ししよう> ・大発見をよく分かるように伝えるにはどうしたらいいのかな ・科学読み物を読もう	(1)	写真を見て 想像を膨らませながら読みかせを聞こうしている
2 「だれだかわかるかな」を読む ・あげはちょうから読んでいこう ・写真にぴったりの文が書いてあるね ・文だけよりも写真があった方がよく分かるね ・一番すごいことを説明してあるよ ・問題と答えだ クイズになっているね ・よく分かるように伝えるには4つの方法があるよ	(1)(2)	写真と説明されている事柄を結びつけて 想像しながら読むことができる
3 紹介したい事柄を説明文にまとめる ・説明するものが決まったよ ・写真にぴったりの説明を書こう	(2)	語と語や文と文の続き方に注意して書くことができる
4 写真紙芝居発表会を開く ・どんなふうにお話ししようかな ・発表会のはじまりだよ ・どんな発見があるのかな ・学習のふりかえりをしよう	(1)(2)	写真から読み取ったことを分かりやすく説明することができる よくできていることを見つけようとしている

教室の規範 (1) 自分の考えを持ち、みんなに分かるように表現する

(2) 友達の考えを聴き取ろうとする

のではなく、「〇〇さんの言いたいこと言える人。」とか「〇〇さんのいうことが聞けた人。よく聞いていたね。」と言うようにクラス全体に広げていくことで、「わかるっていいね。」「伝わるっていいね。」と言う満足感が子ども達の中に生じるだろう。そうなった時、「みんなでする勉強」が一層深まると考える。

③ 評価について

授業のはじめには、読みのめあてを子どものものとし、終わりには、読み取ったことをふり返らせたい。具体的には、黒板に「べんきょうのやま」を書き、めあてをはっきりさせる。(写真1) 授業を進めていく中で、光る発言をした時や分かりやすい表現、友だちの発言にうまく関わった子などをすかさずほめ、子どもの読みがちながるように「やま」に位置づける。子どもは、「やま」を見ることで、勉強がどのように進んでいるかを視覚的にとらえることができる。さらにお互いのがんばりも評価し合える。このように認め合いながら学習を進めたい。また、一人一人がふりかえりとしてワークシートに内容と文章構成について書き、その時間に獲得したものを「あしあとカード」として教室に掲示し、自分たちが写真紙芝居の説明文を書く時に役立てたい。

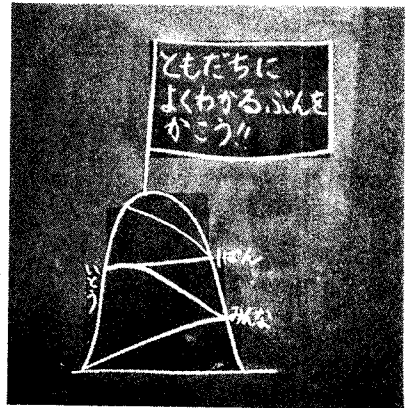


写真1 べんきょうのやま

(5) 本單元における授業の実際と考察

① 発見を友達に知らせよう (共有)

新しい発見を友達に知らせるには どのように説明したらよりわかってもらえるかという目的意識をもつことができる

まず、子どもに、虫めがねを渡し、「博士になって、中庭へ出て大発見をしよう。」と呼びかけた。子どもは、虫めがねを持ったことで意欲満々で中庭へ飛び出した。その際に、「友だちに知らせたい自分だけの発見を見つけよう。」と声かけをしたため、どの子も自分だけの発見をしようと熱心に観察をしていた。虫めがねを持たせたことで、子どもは、その子なりの新しい発見や不思議を見つけることができた。(写真2)



写真2 みつけたみつけた大発見

観察の後は、「見つけた大発見を一つだけみんなに知らせよう。」と声かけをした。一番知らせたい発見を選び、大発見カードにみんなに説明するように書かせた。そして、全員に大発見を発表させた。黒板は、子どもの大発見でいっぱいになった。また、どの子も友だちの発見を聞きのがすまいと真剣に聞いていた。全員の発見が終わった後で、「だれの発見が一番よく分かったかな。」と問いかけた。よく分かる説明の子の名をあげ、その理由を話させた。話をしていくうちに、「どんな形か話すと分かる。」「何色か話すと分かる。」「大きさや形を話すと分かる。」「様子がよく分かる言葉を使うといいよ。」というように説明の観点がはっきりしてきた。説明の観点について話をした子をほめ、「べんきょうのやま」に名前を書いた。その時、「文だけより写真があるととってもよく分かると思います。」という意見が出た。この意見に、他の子どもからも「そうだよ。言葉だけでは分かりにくい。写真があるとよく分かる。」と賛成意見が出された。その結果、大発見を分かりやすく伝えるためには、

・写真を使うとよい
・自分のことばを使う

の二つが大切ということをつかんだ。その後、写真紙芝居を読み聞かせた。子どもから自分たちもしてみたいという声があがり、学習課題「発見したことを写真紙芝居にしてお話ししよう」を

設定することができた。

虫めがねを持たせたことで、子どもは、その中に思いもよらない発見をした。その発見を友だち同士で伝え合うことから学習を始めたことは、学習課題を子どものものにするために有効であった。その際、自分の発見を分かってもらうためにはどのように説明したらよいかという説明の方法に目を向けさせことも目的意識をもたせるために役立ったと考えられる。

学習課題が決まった後、科学読み物（写真絵本）を集めたコーナーを設置した。ここには、教師が用意した昆虫や動物に関する本を並べた。学校の図書室や公立の図書館から借りてきたもので、50冊ほどあった。

子どもは、まず、その数に驚いていた。しかし、昆虫や動物に関心が高まっているため、意欲的に読み始めた。その際、読書カード「しゃしんえほんではっけんしよう」（資料1）を持たせた。これに記入しながら読むことで、自分が説明したい本を選ぶと共に、たくさんの科学読み物にふれることがもできた。

② 写真と説明文のつながりを考えよう（洞察・共感）

教科書の本文と写真のつながりを確認したり 構成を整理しながら読みを進めることができる

本単元では、写真を使った問いかけや答え方を考えながら、内容の大体を読むことを目標としている。説明文では、本文と写真やさし絵の関連が密接である。子どもは、説明文を読む時、写真やさし絵などの視覚的な情報によって、内容を深く理解したり、想像を膨らませたりする。読む力を確かなものにするには、写真と説明文のつながりに目を向け、明らかにしていくことが大切であると考え。導入段階で学習課題「発見したことを写真紙芝居でお話しよう」をたてたことから分かるように、子どもは、写真を使うと文だけよりは、聞いている人に分かってもらえることができると考えている。しかし、説明されている文章と写真の関連が密接であることには気づいてはいなかった。写真を使って説明する場合に、自分の説明したいことにぴったりの写真を選んだり、写真にぴったりの説明の文を書く必要があることに気づいていないのである。そこで、写真と文章を比較しながら、教科書教材「だれだかわかるかな」を読み取ることによってそのことをつかませたいと考えた。さらに、問いかけと答えといった文章構成にも目を向けさせ、この構成を使うと、聞き手によく分かる説明の文になることにも気づかせたいと考えた。

「だれだかわかるかな」は、子どもにとって親しみのある昆虫をとりあげた説明文である。あげはちょう、しおからとんぼ、かぶとむしの3種類の昆虫が大きな写真とともに取り上げられている。どの昆虫の説明も、「だれだかわかるかな」という問題提示文から始まり、その答え（昆虫の名前）の明示の後、体の特徴や行動について、4～5文で構成されている。読み取りは、まずあげはちょうから始まった。前時まで、子どもは、写真を使うと説明することがよく分かることに気づいている。そこで、教科書のあげはちょうの写真を拡大したものを提示して、「この写真から分かることはあるかな。」と聞いた。そして、写真を見て分かることを発表させた。本学級では、挙手した子だけをあてていくとどうしても限られた子だけが発言してしまいがちになる。そこで、順番に発言させた。子どもは、目のこと、口のこと、トゲのこと、触覚のことなど様々なことに気づき、全員が発言できた。しかし、順番に発言していくと、どうしても発言が、単発的でつながりのないものとなってしまう。ここでは、順番に発言させるのではなく、発言できる子からさせていくべきであった。また、そのつど子どもの発言と写真とつなげて確認していくべきであった。一人一人の発言は黒板には位置づけたが、せっかくの発言も写真とつなげなかったため、聞いていたどもに実感を伴わなかったと思われる。ここで、子どもの発言を写真とつなげておけば、次の学習活動である本文と写真のつながりの確認がもっとスムーズにできた

しゃしんえほんではっけんしよう

1の3

* よんだ本で、みんなにしょうかいしたいなあとおもつものに、○をつけよう。そのほかでも、いちばんしょうかいしたいものに□をつけよう。



本のなまえ	しょうかいしたいなあ
1 どうぶつのあっぱい	
2 どうぶつのめ	
3 どうぶつのほせ	
4 どうぶつのくち	
5 どうぶつのおみ	
6 かみしほい・タンボウ	
7 かみしほい・カゲツムリ	
8 かみしほい・アサマシ	
9 かみしほい・サリガニ	
10 かみしほい・アゲハチョウ	
11 かみしほい・キリギリス	
12 かみしほい・ナナホシテントウ	
13 除虫菊さがし	
14 がんばれ かぶとむし	
15 あまのしくん	
16 かまきりによっせ	
17 ひしのせとあぶらげみ	
18 おかえり あかたんぼ	
19 とびたて てんとうむし	
20 カマキリのかんさつ	
21 アリの一日	
22 ススムシ	
23 コオロギ	
24 アカトンボ	
25 クワガタムシ	
26 カストムシ	
27 カストムシ・クワガタムシ	
28 アスラケ	

資料1 「しゃしんえほんではっけんしよう」カード

思う。

導入の後、キーワードを抜いた本文を写真の下にはった。その後、当てはまる言葉を考えていくうちに、あげはちょうの口の形に対して様々な意見が出てきた。写真と「まるまっています」という叙述をつなげて読ませたいと考え、意見を聞き合った。どの子ども、友だちの考えを一生懸命聞いていた。しかし、A児から出た「みつをすっている時は口は長いけれど、こうやって口を丸くしている時は、細長丸（ほそながまる）だよ。」という意見を教師がうまく広げられなかったために、意見の広がりが見られないまま1時間が終わってしまった。

そこで、次の時間は、もう一度、口の形を明確にするところから始めた。以下、授業の様子の一部を述べてみる。

T: あげはちょうの口はどんな形かな（「べんきょうのやまを」を黒板にかく）

C: ドーナツみたいですよ。（黒板に絵をかく）

B: うずまきです。くるくるって丸まっているって書いてあるからです。（黒板に絵をかく）

C: ぼくも、Bさんとちょっといっしょだけど、絵はちょっと違うところがある。斜めになっています。（黒板に絵をかく）

T: 自分は、どれだと思えるかな。（挙手をさせる）どこでそう思うかな。

A: まわると口になるけれど、1回の丸だったら口が小さくならない。何回も一周して小さくしてるんです。

T: Aさんの言いたいこと、分かる人。

C: Aさんの言いたいのは、このことです。（前へ出て写真をさす）

T: ここが、まるまっているんだね。（黒板の写真と「丸まっています」を線でつなぐ）

A: 昨日もいったけれど、みつをすっている時は口は長いけれど、こうやって口を丸くしている時はみつをすっていないんです。（手で丸を作る）

C: みつをすう時、口はまっすぐで、すわない時は、丸くなるんです。（手でやっているが、やりにくそうなので、教師がひもを渡す。ひもをつかしながら）これがみつをすう時で、すわない時は、くるくると丸くなってかたづけるんです。

C: 変身している。変身口や。（何人かつぶやきあり）

T: 変身っていうことは、みつをすう時は、どっちの写真ですか。

C: こっちです。あげはちょうは、長く伸ばした口でみつをすいますってかいてあるから。

C: あげはちょうのくちは、ながくのびますってかいてある。こっち。

C: 写真のことが上に文で書いてある。

T: 写真と文はぴったりだね。

（写真と叙述を線でつなぐ）

C: みつをすわないときも、写真とぴったりだよ。

（教師が線でつなぐと、「残る文がある。」の声があがる。）

T: 残った文は何が書いてあるのかな。読んでみよう。（全員で音読をする。）

C: こっちは問題です。こっちは答えです。

（教師が問題と答えを色分けする）

クイズになっています。

C: あげはちょうクイズだね。

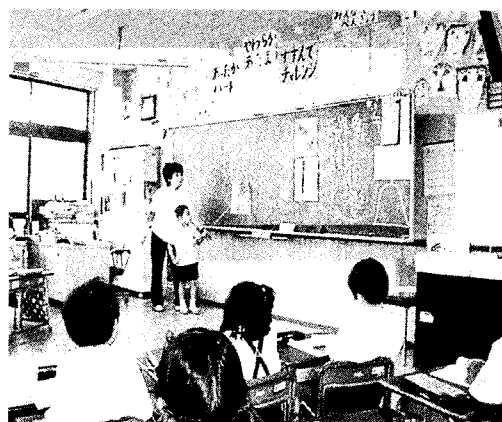


写真3 前へ出て説明するよ

本時は、前時の失敗を生かして、まず、口の形を明確にしながらかみ進めることとした。やはり、「まるまっています」という言葉は子ども全員のものにはなっていなかった。そこで、もう一度、自分の考えをはっきりさせ、どこでそう思うかを問うた。子どもにとって、根拠となる文をあげることは簡単ではないが、それでも何人かの子が叙述をあげた。ここで、A児が、昨日の自分の考えをもう一度述べた。今度は、それを自分の言葉に置き換えて話す子が出た。これは、自分の根拠を考えさせることにより、友だちの発言を聞く時も、わけを考えながら聞くことを意

識したためではないかと考える。そのため、発言がつながり、友達の考えを聞いて、自分の考えをさらに深める子が出たのではないか。そして、自分の考えを分かってもらうために、前へ出たり、動作化したり、実物で説明したりという表現方法を用いたと思う。

このあと、教師から「どうして筆者は、口のことだけを書いたのかな」と発問をした。C児から、「それが、あげはちょうの特徴だからです。」という意見が出された。その時、「特徴って何か分からない。」という声があがった。それをD児が、「特徴っていうのは、一番すごいところです。」と言い換え、みんなに広めた。

本時の終わりには、大発見を分りやすく伝えるための方法として新たに、

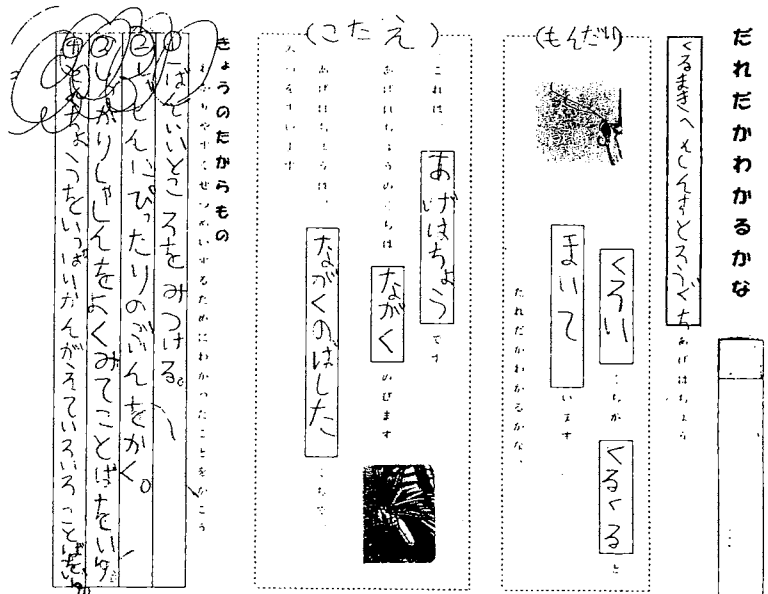
- ・一番すごいところ（特徴）を見つけて書く
- ・写真にぴったりの文を書く
- ・クイズにすると分かりやすい

の3つをつかむことができた。それをワークシート（資料2）にまとめた。これにより、文章構成をつかむことができ、しおからとんぼやかぶとむしの学習もこれらのことを生かしてスムーズに進んだ。

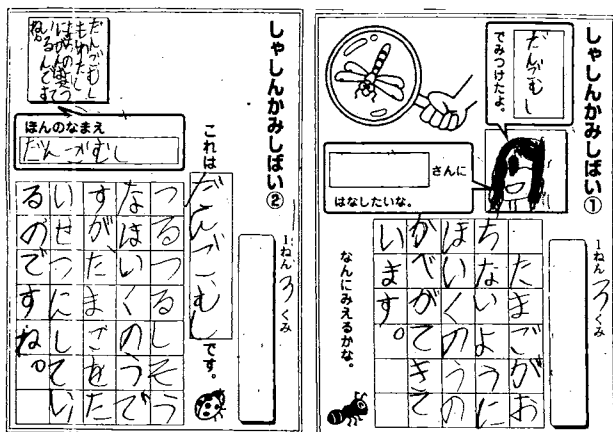
③ 大発見を説明文に書こう（調整）

写真を選び 紹介したいことを分かりやすく説明文にまとめることができる

いよいよ、説明文を書くことになった。導入段階の後、すぐに並行読書を始めたため、ほとんどの子が写真を選んでいった。今までの学習でつかんだ大発見を分かりやすく知らせるための方法を確認し、ワークシート（資料3）に書き込んでいった。どの子も、スムーズに書き進み、ほとんどの子が1時間で書き上げることができた。（写真4）しかし、中には、なかなか書き始められない子がいた。そこで、教師がその子と一緒に写真絵本を読み、何についてどんなことを書きたいのかを聞きながら、助言した。その内容も、その子なりに写真の特徴をとらえ、自分の表現で書き表しているものが多く見られた。これは、並行読書をしてたくさんの写真やさし絵に出会うことで、本当に自分が興味をひき、説明したいものを見つけることができたためと考えられる。



資料2 あげはちょうワークシート



資料3 写真紙芝居用ワークシート

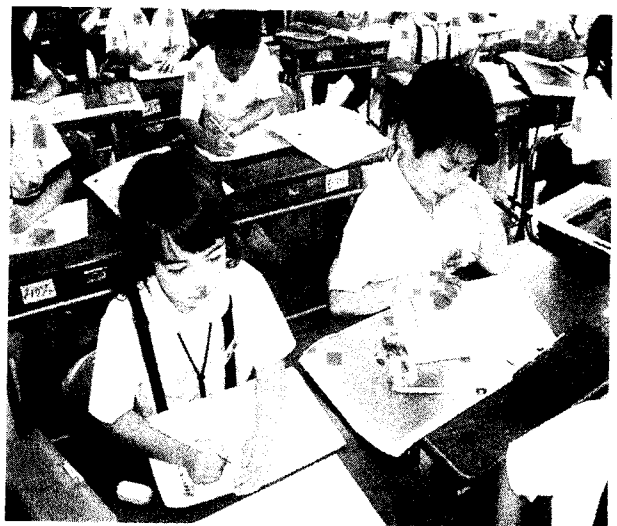


写真4 よし このことを書こう

④ みんなに知らせよう (適応)

- 写真紙芝居の発表会をすることができる
- 友だちのよいところを見つけることができる

次は、発表会のための準備である。ここではまず、発表の仕方を選ばせた。一人であるか、ペアであるか、少人数グループ(4人まで)であるかの3通りである。子どもは、自分の選んだ写真と書いた説明の内容を考えながら、発表の仕方を選択した。ワークシートの裏に貼った写真を見せ合ってグループ分けを行った。約半数の子が一人で発表することになった。後の子はペア発表とグループ発表である。後者では、同じ動物の違う写真を使って説明したり、動物は違っても同じ部分の写真を使うなど工夫がみられた。

写真紙芝居発表会では、友だちの紙芝居を真剣に聞いている姿が多くみられた。(写真5) ふりかえりカード(資料4)でも、友だちの説明のよいところや話し方のよいところを見つけたり、自分の発表をふり返る姿がみられた。



写真5 ぼくの説明 わかりましたか

「ジャッチボール勉強」
友だちのよいところ

1. ともだちのせつめいをきいて
*せつめいがよくわかったおともだちは

(さん)

*おともだちのよかったところをかきましょう

さんはおおきく、なこえで、
はつきりとしていて、ひとにきいてもらいたいきもちで、よれみをしないうで、
はづょうをうして、いました。

2. じぶんのせつめいをふりかえろう

1. とくちようをみつけれましたか。

2. しやんにびつたりのぶんがかけましたか。

3. じぶんのことはでかけましたか。

○ ○ ◎

◎しつかりできた○できた△もうすこし
*このべんきょうをしおもったことをかきましょう。

このべんきょうでは、いんなんが、
ことをはづょうして、しんなんが、
んきょうとくちをあげたべんきょう
うて、もだいなべんきょうだ、
もいます。

資料4 ふりかえりカード

(6) 単元を終えて

本単元を終えた後、子ども達に次のような変化がみられた。

- 読書のジャンルが広がったことである。本単元で科学読み物を多読したことにより、今まで以上にいろいろなジャンルの本の存在を知り、手に取る子が出てきた。
- 大事な言葉は何かを考えながら文章を読むようになった。
- 発言をつなげていこうという意識が芽生えてきたことである。「キャッチボール勉強」と名付け、友だちの考えをよく聞いて、前の人の考えに続けていこうとする姿が見られるようになった。
- 学習に見通しを持つことの大切さに気づいたことである。次単元「おむすびころりん」では、一読後、「おじいさんになって声に出して読もう」と学習課題が子ども達からあがってきた。また、「手紙を書こう」でも、「自分たちもお手紙を書いてみたいよ。」の声があがり、そのためにどうしたらよいか簡単な学習計画を考えることができた。

これらのことは、自己学習力をつけるために欠かせない。これからも自分たちでする勉強の大切さに気づいてくれればと期待している。

(7) 今後の課題

子どもは、少しずつはあるが、みんなでする勉強のよさや楽しさを実感できるようになった。しかし、まだ、みんなの前で読みを話すことに抵抗があったり、自信のない子もいる。今後は、それらの子も自信を持って考えが出すことができ、みんなで高まり深まることのできるりの学習をめざしたい。

国語科の読みの力の面からいえば、つけたい力を明確にし、プロセスを考えた言語活動を経験させたいと考えている。楽しんで本を読み、読書の世界をより一層広げていける学習や、言葉に目をつけながら場面の想像をより広げる読みの学習など、目的に応じた様々な読み方ができる力をつけていきたい。

実践例 — 5年 —

4月この子ども達と出会って「なんと素直に喜び、人のよさを認めようとするのだろう」と感心した。だが一方では、自分の心を開いて話そうとする子どもは、一部に限られ、「話す」「聞く」ということを楽しんでいる子どもは少ないというのが印象であった。授業中の発言は教師に向かって話そうとする子どもがほとんどで、子ども同士の「話し合い」の姿は、あまり見られなかった。だからこそ、この実態をふまえて、子ども同士でお互いの考えを聞き合い、話し合い、高まったり深まったりする授業をしていきたい、という思いを強くもった。コミュニケーションの根幹をなす「話す・聞く」力を身につけることは、豊かな人間関係を育てていくことにもつながる。心に思っていることを伝え方を誤れば、相手に不快感を与え、心のつながりを紡ぐどころか、相手を傷つけてしまったりもする。逆に言葉を大切にし、使い方を工夫して心をこめて話すことによって、相手の心を豊かにし、自分までもが温かな気持ちになることもできる。だからこそ言葉の使い手としての正しい認識とスキルをしっかりと身につけ、明確な意志をもって「話す」ことを実践していくことは大変重要である。「聞き手」が「話し手」を育て、「話し手」が「聞き手」を育てる、そんな活動を通して、よりよい言葉の使い手となることを願って、授業を構成した。

(1) 単元名 I love 附属 ～附属小をよりよくするためにできること～

- (2) 目標
- ・話し手は、話の順序を組み立て、話の意図に適切な例や納得される理由をあげて話すことができ、聞き手は自分の意見を比較して相違点が理解できる。
 - ・学校生活の中で、様々な意見に賛成、反対の意志を明確に自覚し、積極的に自分の考えを表現し、よりよい意見を構築しようとする態度を育てる。

(3) 国語科としての学びと規範にかかわって

本単元では、「相手の考えや意見を聞き、その根拠や理由を考え、自分の考えと比べ、違いを明確にし、聞き返して意図を確かめ、自分の意見を深めること」に主眼をおく。

高学年の仲間入りをして意欲満々の子ども達。附属小学校全体を見てより良い学校にしていこうという意識が芽生える時期でもある。それを好機ととらえ、自分たちの学校の良さを見つけて広めたり、改善点に目を向け対策を考え出したりする活動を行う。その中で「相手を大切にしたい伝え方」「よりわかりやすい伝え方の工夫」「高学年としてのめざすべき話し方・聞き方」などを身につけることができるだろう。

「教室の規範」の視点から言えば、本学級の子供達は、自分の意見を相手に分かるように話したり、話し手が言いたいことを的確に聞き取ったりすることは、身につけてきているが、個人差がある。この単元では聞き手の心を動かす「話す力」が必要となるので、「より効果的な伝え方」を工夫していく活動を通して「人の意見を認め尊重し、自分の意見を修正したりしてよりよい意見を構築する」姿を願い、「他者を認める」「自分の意見をよりよくする」という規範意識を育むことにつながると考える。

そこで、本単元では「学びのシェア」の「共鳴（共感）」の場を大切にしたいと考え、授業構想を行った。一番身近な学校生活に目を向け「挨拶すると気持ちがいいと言う経験を積み重ねることで、挨拶の音が響く学校になったらいいな」とか「いろいろな遊具があって安全に気をつけたりルールを守って遊んだりすればとても楽しいことを1年生に工夫して伝えることで、より楽しい学校になるだろうな」などという理想の学校作りのプランを立てる。その中で高学年としての自覚がさらに高まり、伝えるべき相手をしっかりと意識した伝え方を行うために大切な「伝え方の工夫」を身につけることができるようにしたい。

(4) 集団のよさが息づく授業へのいくつかのアプローチ

① 「学びのシェア」のプロセスとのかかわりから

「附属小学校をよりよいものにしたい」という思いを大切に、今の学校生活のよいところや

改善すべき点を自分で洗い出し、仲間との話し合いを通し、個々の思いを共有する場を設定し、伝えたいことを明確にしていく。さらにどう伝えていくことが効果的かをいろいろな伝え方の例（コマーシャル製作、紙芝居、寸劇実演、ニュース風、すごろくなど）を子ども達の中から引き出し、それらをコラボレーションの場として効果的に活用することで、より楽しく、聞き手が心動かして聞くことができる場を話し手がつくっていかうとする意欲をもたせたい。

単元計画（総時数 9 時間＋課外）

主な活動と内容	主に意識する規範	評価のポイント
<p>1 「I love 附属」について話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本がいっぱいある図書室が大好き 1年生に教えたいな ・6年生が進んで掃除してくれるよ 感謝の気持ちを6年生に伝えたい ・遊具がたくさん 安全な遊び方を1年生に伝えたい ・バスマナーが悪いよ 何とかして直したいね ・あいさつをしない人もいるよ ・もっといい学校にしたいな <p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">附属小のすてきや改善点を伝えたい人に伝えよう</p>	(2)	<p>附属小の「すてき」や「改善点」に目を向け、「附属をさらによくしたい」という気持ちをもつことができる</p>
<p>2 伝え方の工夫について話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題別グループで工夫を考えよう ・今の実態を調べてみよう インタビュー アンケートなどで ・あいさつをする人が少ない どうやってまとめようか 新聞かな ・校歌を心こめて歌っていない気がする 校歌の意味を伝えよう ・バスマナーがまだ悪いところがあるな ・もっといい学校にしたいな ・みんなが「附属大好き」になるように楽しく伝えたい ・どうやって伝えるのが効果的かな 順序をどうしよう ・伝えても心を動かし行動にうつしてくれないと意味がないな 	(1)	<p>効果的で聞き手にとって分かりやすい伝え方を工夫しようとグループで伝えたい内容の順序を考えたり話し方の工夫を話し合ったりしてグループ内の対話を行うことができる</p>
<p>3 自分たちなりの伝え方を考え プレゼンテーションする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほかのグループに聞いてほしいな ・改善点をアドバイスしてほしい ・アドバイスがほしいところがあるな ・聞くポイントを示して聞いてもらおう ・アドバイスカードを話し手の方で作って配ろう ・校歌グループのプレゼンが聞いてみたいな ・ニュース風に伝えると順序がはっきりしてわかりやすい ・聞き手の目を見て話すと強く伝わる気がする 	(2)	<p>ほかのグループとの話し合いや対話を通して見つかった改善点をもとに伝え方の見直しができる</p>
<p>4 アドバイスを取り入れてさらに効果的な伝え方にする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生に話す時はもっと分かりやすい言葉で簡単に伝えることが大事 ・話す順序を入れ替えた方が確実に伝わる ・間の取り方や聞き手の巻き込み方がまだ下手だから直そう 聞き手の様子をしっかり見てないからだと思う ・放送ではカメラの向こうの聞き手をしっかり見よう ・はじめに聞いてほしい大事なポイントを言う方がわかりやすい ・聞き手が聞き入れようとしているかアイコンタクトで確かめよう 	(2)	<p>話す順序や資料提示の方法や間の取り方に気をつけ 聞き手の様子を受け止めながら 聞き手の立場になった伝え方ができる</p>
<p>5 伝えたい相手のところへ伝えにいった感想を交流する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・附属小の「すてき」を大事にしたいって言ってくれたよ ・「ありがとう5年生」って言われたよ ・相手に応じたもっと効果的な伝え方があるような気がする ・伝えてもなかなかあいさつが上手にならない なぜかな ・相手の心を動かす伝え方って 本当に難しいね ・まだまだ「話す力・聞く力」を鍛えたいな 	(1)	<p>話し合いの効果を確認しながら活動を振り返ることができる</p>

教室の規範 (1) 他者を認める
(2) 自分の意見をよりよくする

② 規範について

「伝え方の工夫」次第で話し手はより意欲をもって効果的に伝えることができ、聞き手は聞くポイントを意識しながら聞くことができる。誰にどのように伝えたいか、聞く視点はどのようなものを与えるか、どんなカードを作れば聞き手はメモしやすいか、などを自分たちのグループでプランニングさせたい。そのプランを掲示することでほかのグループへの参考としたい。その際、その伝え方がなぜ有効で、どう活用することが効果的かを自分たちでしっかり意識させたい。

グループごとに作り上げたプレゼンをほかのグループの子に見せることで自分達の改善点、良い点が浮き彫りにされ、より効果的な表現につながるように意見交流を行う。そのためには聞き手の関心の喚起につとめ、うまく聞き手を巻き込みながら、対話していく中で行われる両者の協同的なコミュニケーションの過程を大切にしていきたい。また聞き手に、聞く視点を書いたワークシート（話し手が作成）を渡し、聞く視点を絞ってより集中して聞くことを促したい。そうすることで「人の意見を認め、自分の意見に生かし、よりよい意見を構築する」という子どもの規範意識を高めると考える。

③ 評価について

ほかのグループからの批評や対話や聞き手からもらった「聞く視点カード・アドバイスカード」をもとにして、グループ内で話し合い、より良い表現の仕方をめざして自分たちのグループのプレゼンを改善していく。そして目的の相手へ伝えたいことがしっかり伝えられたかの自己評価も行い「より良い学校にしていこう」という気持ちが伝えられたかを確かめさせたい。

(5) 本單元における授業の実際と考察

① 「I love 附属」について話し合う（共有）

附属小の「すてき」や「改善点」に目を向け、「附属小をさらによくしたい」という気持ちを伝えようとする意欲をもつことができる

自分達の学校のここが好きだからもっとよくしたい、ここはよくないから改善したい、などそれぞれの学校生活への思いを大事にし、自分達でできる改革を実行していこうという思いで、子ども達は活動を始めた。あいさつを広げようグループ、1年生に行事を伝えようグループ、時間のマナーを守ろうグループ、バスマナーを守ろうグループなどそれぞれがよくしたいと思っている課題別にグループを結成して、思い思いの方法で情報を集め、自分達の考えをまとめていった。イメージマップ（資料1）にどんどん自分の思いをまとめていくとその子どもの考えている思考の流れがよく分かり、ノートをコピーしたものを掲示（写真1）しておく子ども達がお互いの考えを知ることができる。

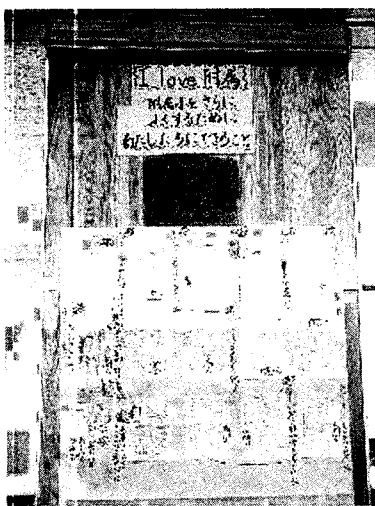
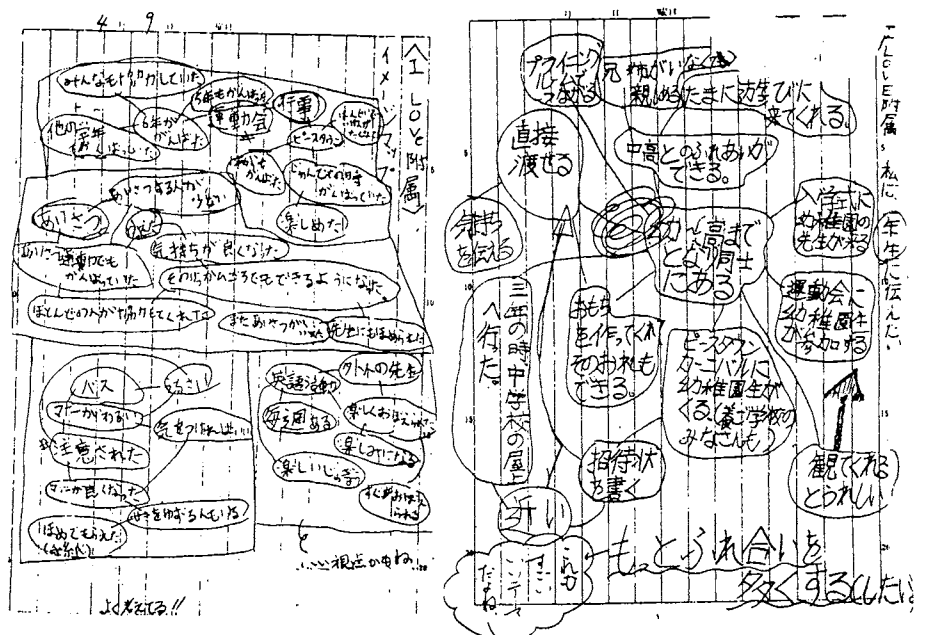


写真1 イメージマップの掲示



資料1 一人一人のイメージマップ

③ 自分達なりの伝え方を考え、プレゼンテーションする（共感・共鳴）

ほかのグループとの話し合いや対話を通して見つかった改善点をもとに、伝え方の見直しができる

自分達で決めたテーマのもとで伝えたいことをまとめ、相手に合わせてどういう伝え方が効果的かを模索し、よりよいプレゼンテーション力を養うために、まずは、クラスの仲間にプレゼンを行うことにした。そのとき気づいたよい点や改善点をアドバイスしてもらって自分達のプレゼンをよりよく改善していくという活動に取り組んだ。

以下が「1年生に行事を伝えるグループ」のプレゼンの一部である。

C：紙芝居のよさは何だと思えますか 考えるのに何分いりますか

C：3分ください

（子ども達が机間巡視をする）

C：そろそろ3分なんですけど 考えはまとまりましたか

C：1枚1枚に心がこもっているので伝わるところがいいと思えます

C：いろいろな絵を描けば楽しさが表現できる

C：違う意見はありませんか

C：伝えたいことをひとつに絞って伝えられる 聞いている人たちにはっきり伝えられる

C：1年生だったら話だけより集中する

C：絵で伝えるからわかりやすい

C：新1年生だったら絵で伝えた方がわかってくれる おもしろいところがあるから

C：文より絵の方が伝わる 大きいからいっぱいに見られる

C：絵が表で字が裏 絵のところだけ集中して見られるから

M：みんなが言ったように紙芝居にしました



行事の楽しさを伝える子ども達

感想カード ◦声の大きさはどうでしたか？

名前() 行事グループ ◦ ◦ X

話し方について ◦聞き手の話し方でしたか？

◦目線は聞き手を見ていましたか？

◦ X

◦ゆくり分かる話し方でしたか？

◦ X

◦聞き手が分かってるか、からにんしてましたか？

X

◦どんな内容でしたか？

1つ1つの行事を伝えていた
1冊性に伝えようとしている。

フリー感想

良い所

・1つ1つ45番の説明していき
・わかりやすい
・行事の説明がゆくりゆくりと
しててよかった。

アドバイス

・目を聞き手の方に見ていく
・声の大きさがいい
・目線をみんなの顔にたまたま
たはついで
・たがはついで、たがはついで。

資料5 話し手が作成した感想カード

ここで考えなくてはいけないのが、話し手側のM児の言葉である。話し手が聞き手に意見を求めて話を進めていくのだから、聞き手から引き出した考えを「みんなが言ったように」という言葉でひとくくりにしてしまうのではもったいない。板書に位置付けられた言葉などをさしながら、「今のみなさんの意見と同じで、わかりやすい、心がこもっている、楽しい、集中できるなどの理由から、私達も紙芝居がいいと思って紙芝居に表現することにしました。」とM児が進められるように教師が助言すべきであった。そういう相手を受け止める、認める言葉を言えることが聞き手と話し手の協同的コミュニケーションの具現化と言えるのではないか。聞き手が一生懸命話し手の話に参加していることを、話し手がしっかり受け止め、認めていくことが大切である。

次にM児は紙芝居を行う前に「聞いているみなさんは感想カードを書きながら聞いて下さい」と伝えた。この感想カード（資料5）は、聞き手から自分達の紙芝居へのアドバイスをもらいたいということで話し手が自ら作成したものである。この感想カードやアドバイスカードは、アドバイスや感想をほしいポイントを絞って作成したものであるから、実に効果的なカードと言える。聞き手はそのカードに従って聞くことによって、話のポイントを意識して聞くことができるし、話し手は自分達のほしいアドバイスを的確に聞き手から引き出すことができる。こうして、

- H: ろうかのマナーを守るグループとタグを組みたいと思います
 C: 守れたらニコちゃんマークをつけたらいいと思います
 C: マークっていうのはいろいろ工夫して変えてもいいし、一年生は悪いという区別がついていないと思いませんか C: はい それで呼び掛けの言葉をカードに書いたらいいと思います
 C: (つぶやき) 守れなかった時は、×じゃなくてバイキンマンにすればいい
 C: わたしは校内を走る人が多いと思います 去年廊下を走らなかったら青く塗っていくカードがありましたね 毎日青が続くと嬉しくなるのでこのカードはいいと思います (中略)
 C: カルタも作りました 実際にやってみたい人いませんか
 M: (つぶやき) 手作りっていいねえ いい感じや
 C: (かるた開始) みんなそろって授業始めよう
 絶対 ○百個いくぞう
 いつのまにか時間が過ぎていく
 スタンプカード ○をためよう
 わすれないで時間のことを
 まっ大丈夫と思わないで
 おくれないよう 5分前行動
 時計見て行動しよう



マナーカルタをやってみよう

- T: やって見た人感想は?
 C: このカルタは全部手作りで言葉とか考えるのが大変だったと思うけど、22枚も考えるなんてすごい 時間について考えてあるからすごい
 C: つながりをつけて時間を守るってことがよくわかりました
 C: カルタで「これは守ろう」ということを説明していたので 私も守ろうという気になりました

このグループのプレゼンのよさは、以下の3点である。

- スタンプカードの工夫した活用の仕方を聞き手から引き出している
 低学年でも抵抗なく楽しくスタンプカードに取り組めるようにキャラクターを書き込んでいくとか、呼び掛けの言葉をカードに書き込んでおくなどのアドバイスを引き出すことができた。
- 実際に聞き手を巻き込んでカルタをやってもらうことで そのよさを体験させている
 聞き手参加型の協同的なコミュニケーションの場を作っていくことで、受け身になりがちな聞き手の意識を活性化すると共に「聞く」という活動に、より積極的になることができる。
- カルタという遊びとマナーを守ろうという呼び掛けをコラボレーションした結果が相乗効果を上げている
 カルタを実際にやってもらうことで、心を解放して、楽しく豊かに「聞く・話す」ができる。日頃話すことが苦手な子どもでも、楽しく参加して感想を述べるのが「話す」ことへの自信につながる。
 なかでもH児の受け答えは絶妙で、聞き手の反応をしっかり受け止め、自分らしい言葉で返すことができていた。

④アドバイスを取り入れてさらに効果的な伝え方にする (調整)

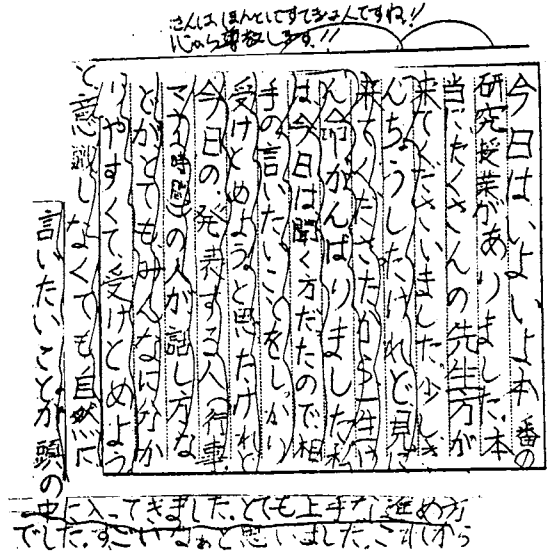
話す順序や資料提示の方法や間の取り方に気をつけ 聞き手の様子を受け止めながら聞き手の立場になった伝え方ができる

子ども達は聞き手からの生の声とアドバイスカードから自分達のプレゼンを見直し、よりよいものにしようと取り組んだ。そこで感心したのは、聞き手として受け止めていた子どもが、実は話し手の立場に立って、アドバイスを受け止め、自分達にも生かそうとしていたことである。他

人事としてすすめるのではなく、アドバイスを自分達ならどう受け止め、改善していけるかを考えながら参加しているのだ。(資料7)



聞き手からのアドバイスを受け止める話し手



資料7 友からの学びを受け止める子

⑤伝えたい相手へ伝えた感想を交流する(適応)

話し合いの効果を確認しながら活動をふり返ることができる

「あいさついっぱいにしようグループ」からこんな悩みが出された。「校内放送で『あいさつしましょう』と呼び掛け、ポスターも貼り、朝玄関であいさつ運動を行ったが、なかなかあいさつしてくれなかったり、無視されたりする、悲しい現実がある」という内容。

子ども達の反応は、「ではみんなで、まずあいさついっぱいグループをサポートしていこう。みんなで取り組めばもっと充実した活動になり、学校中の人の心を動かして、気持ちのいいあいさついっぱいの学校にできるかもしれない。みんなで取り組んでみよう」というものだった。早速次の日の朝から、K児は家で作った「元気なあいさつをしよう」と書いたプラカードを持って、あいさつ運動を始めた。賛同する子ども達が続々とその活動に加わり、朝から明るく元気な「おはようございます」の声が学校中に響き渡った。

6	5	4	3	2	1	月 日(一) 祝
						6月 11日(金) 天気(晴)
						『ゼニ』

あいさつ運動に取り組み始めた子の「あゆみ」より

(6) 単元を終えて

「I love 附属」の学習を通し、「話す・聞く」を自分達なりに工夫して楽しみ始めた子ども達。さらに、授業は自分達で動かすもの、授業で様々な力「思考力、表現力、判断力など」を鍛えようとする姿勢はかなり身につけてきた。中でも「話す・聞く」力はいろいろな場面（授業はもちろん、朝の会、帰りの会、学年集会、プロジェクト、合宿、かしわっ子集会など）で活用され、徐々に伸びている。仲間と共に学び合い、学びを分かち合い共有する場面も1日の生活の中でかなり見られるようになってきた。

「話す・聞く」はいろいろな学習場面の基盤となる。他者の違った考えを知り、受け入れることによって自分が高まることも自覚できるようになり、友達の考えに真剣に耳を傾けることができると共に、自分の考えとたえず比較しながら聞くこともできるようになってきた。

この力を確実なものにするには、日々の「話す」場面の充実しかない。例えば、朝の会での「朝のわくわくスピーチタイム」である。

この時間の継続は、まさに継続は力なりで、日々確実に子ども達の話す力は伸びていく。だが、肝心なのは、ただしゃべればいいというものではない。この時間を繰り返していく内に、実物をもってきて見せたり、さわらせたり、写真を回覧して様子を詳しく知らせたりする子どもが出てくる。その時にすかさずその子どもをほめるのだ。自分のスピーチをより分かりやすく聞き手に伝えようと実物を用意する行動力と心の動かし方を大いに認める。話し手が苦労や努力をしたぶんだけ確実に聞き手の心を動かすことができる。また実物を提示することは「百聞は一見にしかず」で説得力があり、話し手の話す内容と実物のコラボレーションで、より印象に残る話になり、聞き手を引き込むにはこれ以上のものはない。実物の提示もただ出すのではなく、「話す」工夫が必要である。例えば、S児のスピーチを例にあげれば、「この色紙のサインは誰の物だと思いますか？」といきなり聞き手を巻き込んでいく。聞き手は「えっ？誰のかな。松井って読めるぞ。松井秀喜かな？」などと緊張感と興味をもって、話し手の話を聞こうとする。聞く構えを作ってしまうと、話し手の立場としてはほぼ成功である。「静かに聞いて下さい。」とか「話していいですか。」などという声かけなど必要ない。こういう場面を積み重ねていくと自然と聞き手側に「楽しみにして聞く」「わくわくしながら待つ」などの聞く姿勢が身につけてくる。聞き手にその姿勢があれば、話し手もそれに応えようとよりおもしろい内容、豊かな内容で語ろうとする。「よい聞き手は、よい話し手を育てる」のである。先ほどのS児のスピーチは、お父さんが出張でニューヨークへ行かれたので、お土産にメッツの松井稼頭央のサインをもらってきたというものなのだが、実物を見て「わあかっこいい」「うまく読めない」「よくもらえたね」などの反応とともにそのスピーチも印象に残る。「聞く人があんなに喜んでくれてよかった。話すって楽しいことだなあ」とS児は話したことにとっても満足できた。そして聞き手は「次自分だったらどんな話をどんなふうにしようかな」と心動かして聞くことができた。この過程が見えない糧となって確実に「話す・聞く」力の源泉となっていく。朝のスピーチタイムは2、3分の活動でその日の日直が行うのだが、「たかが2分、されど2分」の価値ある意味深い時間なのだ。この時間の継続は確実に「話す・聞く」の基礎を形成してくれている。

話し手は常に聞き手を意識して聞き手の身になって話す。一方聞き手は、話し手の身になって心動かしながら受容的に聞く。こうした過程を日々積み重ねていくことで、子ども同士の大切なコミュニケーション能力が育っていく。

(7) 今後の課題

国語の時間に培われた「話す・聞く」力を毎日の生活の中で活用し、さらに確実な生きて働く力に高めていくための様々な学習場面を組み込んでいく必要がある。また、それらの場において子ども達が友達の意見を認める話し方をしたり、温かな受け止め方をした時には、教師が認め、具体的なめざすべき姿として示してやる必要がある。

「話す・聞く」ことがますます苦手になっていく子ども達。円滑で温かな人間関係を育むには、言葉によるコミュニケーションは最も大切なものと言える。子ども達が、よりよい言葉の使い手になろうという自覚をしっかりと持ち、生き方までもが映し出されるものであることを意識し、自分の「話す・聞く」力をのばしていくことができる授業を子ども達と共に構築していきたい。